

# スカルラッティのソナタ K.96 (L.465) について

野間 晃

抄録：本稿は、ドメニコ・スカルラッティ（1685－1757）の作風を一曲の中に兼ね備えた、ソナタ・ニ長調（K.96, L.465）について、諸々の版本を参照しながら曲の構成と特色を述べたものである。同音反復・不協和音・跳躍・旋律と調性の急変・他の楽器の模倣という、スカルラッティの作風を曲中において解説し、また unpublished version との相違点についても述べた。

キーワード：スカルラッティ・ソナタ K.96 (L.465) unpublished version

## 1. 序

本稿は、同音反復・不協和音・跳躍・旋律と調性の急変・他の楽器の模倣という、ドメニコ・スカルラッティ（1685－1757）の作風を一曲の中に兼ね備えた、ソナタ・ニ長調（K.96, L.465）について、諸々の版本を参照しながら曲の構成と特色を述べようとするものである。

まず、本稿において楽譜を閲覧した版本と文中における呼称は以下の通りである。

- ①ベネチア写本<sup>1)</sup> (Boivin (ボワヴァン) 版)：『Sonate per cembalo del Sigr. Dn. Domco. Scarlatti, 1749』 Biblioteca nazionale Marciana, Venezia, Italia - It.IV,200(=9771)

閲覧先 (2016年12月23日確認)：

<http://seesaawiki.jp/w/tekuteku2008c/d/1749%20-%20It.IV%2c200%28%3d9771%29>

- ② Czerny (Carl Czerny)：

『Sämmtliche Werke für das Pianoforte von Domenic Scarlatti』

Vienna: Tobias Haslinger, n.d. Plate T.H. 7601-7625. 1838-1840

閲覧先 (2016年12月23日確認, K.96 は No.79, p.236～240)：

[http://imslp.org/wiki/S%C3%A4mmtliche\\_Werke\\_f%C3%BCr\\_das\\_Pianoforte\\_\(Scarlatti,\\_Domenico\)](http://imslp.org/wiki/S%C3%A4mmtliche_Werke_f%C3%BCr_das_Pianoforte_(Scarlatti,_Domenico))

- ③ Longo：『Opere complete per clavicembalo/ D. Scarlatti』 / Alessandro Longo

Milano : Ricordi, 1906-1910<sup>2)</sup>

- ④ Kirkpatrick (文中において「現行版」と称す)『スカルラッティ 60 のソナタ (上)』 /ラルフ・カークパトリック著・荒木雄三訳 / 全音楽譜出版社 (出版年記載なし)

(原本 : Ralph Kirkpatrick, 1953, DOMENICO SCARLATTI 60 SONATAS)

- ⑤ Unpublished version (音源) (西野美穂先生採譜, 筆者清書)

Mayako Soné 演奏, 『Scarlatti Unpublished Sonatas』 (1994, CD) Erato4509-94806-2 に収められた No.12 Sonata en ré majeur Allegro Variante de K.96 (Ed.Henle) であり, この曲は, CD の解説書 (Malcolm Boyd 著) によれば：

“No.12 is, of course, a genuine and well-known Scarlatti work which Kirkpatrick included in his catalogue as no.96. It is played here, however, in a little-known version, published in Paris in the 1740s by Boivin, which reduces its length by 69 bars, but which can hardly be thought of as a

simplified version since it retains the difficult repeater notes, huge leaps and athletic hand-crossings of the complete sonata as we know it.

このほか、“パルマ写本”と“ロンドン 31553 写本”については(原田 2011) (「4 筆写譜の比較 (2)」)において、ベネチア写本との相違点が述べられている。

拙稿の完成にあたり恩師である石田光子先生・横浜の平戸先生・萬田充秋先生、そして数々のご教示をいただいた本学こども発達学科の西野美穂先生には深い感謝を捧げたいと思う。

## 2. 本論

### 2-1 前半 第1小節～第114小節

#### 2-1-1 “開始部” (The Opening) <sup>3)</sup> 第1小節～第25小節

開始部は tutti であり、第1小節から第10小節までは、右手の上部は D-E-Fis-G-A の倍音の音程を用いた、ファンファーレを思い起こさせる旋律である。特に第1小節2拍目の D+Fis → 3拍目の A+E → 第2小節1拍目の Fis+D の進行は、“ホルン5度” (譜例3) <sup>4)</sup> の音程となり、第4小節2拍目から第5小節の1拍目はこの逆の音声が行進する。この旋律は前半の終了部、後半の中間と終了部にも現れる。

ロンドン 31553 写本では第1小節左手の A が Cis となる <sup>5)</sup>。(譜例1)



Unpublished version においては、左手の部分に主音 D によるバスを配している。

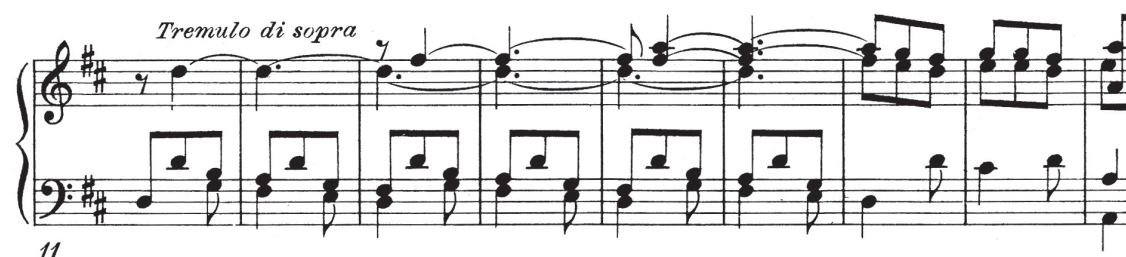
(譜例2)

(譜例3)

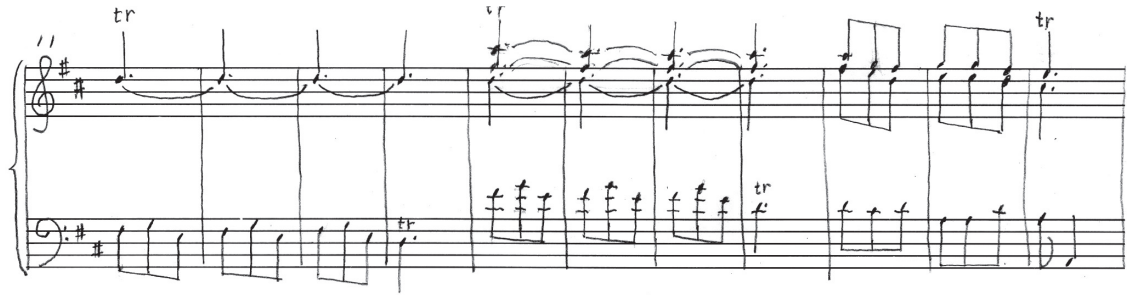


第11小節から第16小節までは、“Tremolo di sopra” すなわち上へのトリルであり <sup>6)</sup>，I の和音を下から2小節ずつトリルで重ねてゆく。左手の3度の和音は第11～13小節，第13小節～第15小節にかけ4度下降を繰り返し第19小節の属和音に至る。

ロンドン 31553 写本では第17小節左手の D が Fis-D となる <sup>7)</sup>。(譜例4)

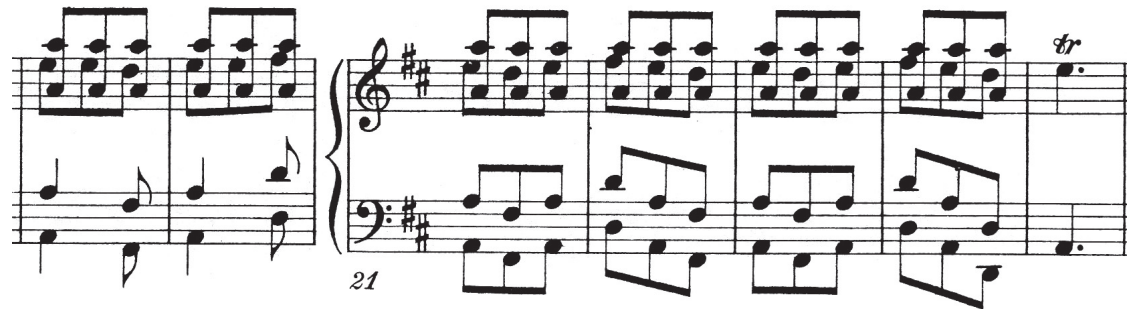


Unpublished version のトリルは、D と A にかかる 4 小節ずつの 2 回である。（譜例 5）



現行版では第 19 小節から第 24 小節までの A のオクターブの和音と冒頭の倍音の旋律を合わせた、ファンファーレの終局を思わせるかのような部分を経て、第 25 小節の属和音によるカデンツに至り、tutti が終わる。この曲ではこの箇所をはじめ多くの箇所においてオクターブの和音が用いられ、音に重厚さが与えられている。第 25 小節（および Unpublished version の第 21 小節）は 1 音節では不安定で、フェルマータを付けるべきところである。

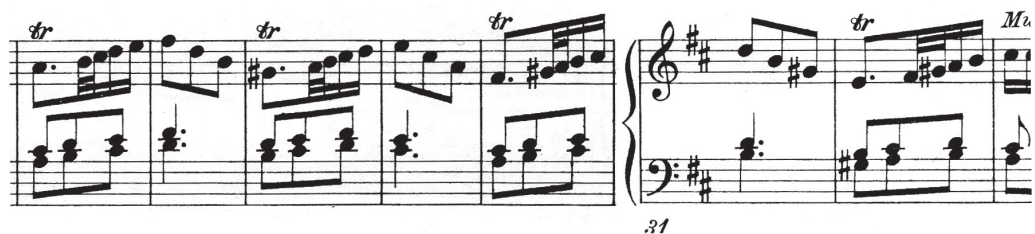
第 19 小節右手の E-E-D は“パルマ写本”では A-Fis-Fis に、“ロンドン 31553 写本”では E-E-E となる<sup>8)</sup>。（譜例 6）



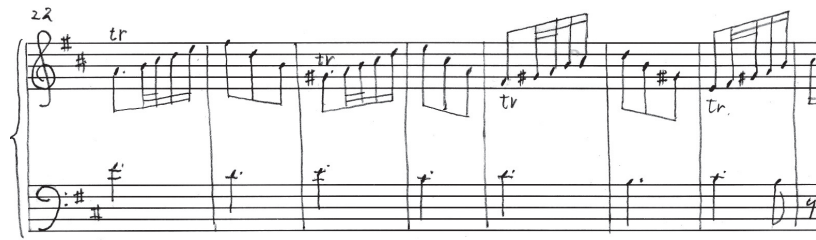
## 2-1-2 “終結調性開始部”（The Pre- Crux） 第 26 小節～第 78 小節

### 2-1-2-1 第 26 小節～第 48 小節

“最初の 25 小節をオーケストラのトゥッティ（全員奏）にたとえると、26 小節目からはソロの部分になる。このソロは速い動きが技巧的で、ギターのようなすばやい反復音も出てくる<sup>9)</sup>”。ここからは 5 度上の属調，前半の終局調であるイ長調に転調する。右手は 2 小節単位で 1 音ずつ下降する。左手の第 26 ～ 27・30 ～ 31 小節における 3 度の和音が上昇する形は、左手の第 11 ～ 13・第 13 小節～ 15 小節における 3 度の和音が下降する形の、5 度上の転回形となっている。（譜例 7）



Unpublished version において対応する第 22 ～ 29 小節の右手は現行版と全く同じであるが、左手は和音にはならず、対位法的動きをする。(譜例 8)



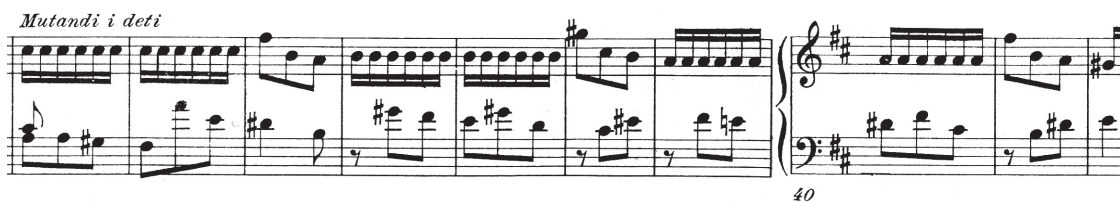
第 33 小節からは 1 音ずつ下がる同音反復が始まる。“Mutandi deti” は“指を換える”という意味であり<sup>10)</sup>、同じような同音反復の例は、更に顕著な例が K.141・221・298 などで見られる。第 38 小節と第 41 拍の右手第 1 拍が強調されるのに対し、左手が休符になっているのは不意につかれるようで効果的である(譜例 9)。これに対し Czerny (譜例 10)・Unpublished version (譜例 11) の相当部とも該当箇所は休符ではなく、1 拍目と 3 拍目は同じ音を繰り返すようになっていて、平板な印象を受ける。

頻繁な転調が起り、第 33・34 小節はイ長調、第 35 小節はロ長調、第 36～38 小節は嬰ハ長調、第 39～40 小節は嬰ヘ長調、第 41 小節はロ長調、第 42 小節 1 拍目はロ長調とホ長調の始まりを兼ねる。

第 33 小節の右手は第 1 音と第 2 音でフレーズが切れる。第 36・39・42～46 小節でも同じことが言え、この箇所にポーズを置くとフレーズ感を出すことができる。

Czerny, Unpublished version においては、右手の第 34 音節 (Unpublished version 第 30 小節) の第 2 拍目は Fis で、現行版より 3 度小さい 1 オクターブの跳躍になっており、また左手の第 38・41 小節 (Unpublished version 第 34・37 小節) の第 1 拍目は現行版とは異なり休符ではなく、1 拍目と 3 拍目に同じ音が繰り返される。また、Unpublished version においては、同音反復開始の第 29 小節目の左手第 1 拍目も休符になっている。第 34 小節の第 1 拍は休符ではなく Eis になっており、また現行版第 38 小節とは逆の上下の動きをする。

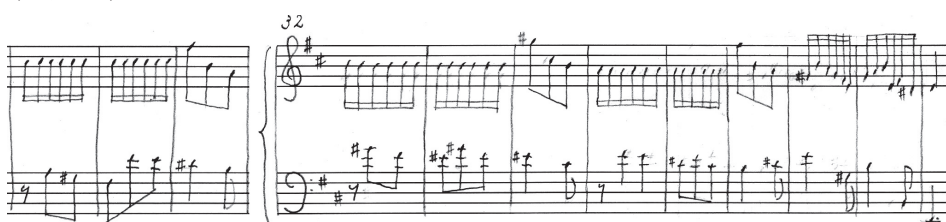
(譜例 9)



(譜例 10)



(譜例 11)



第 43～48 小節は 48 小節目でカデンツとなり、第 48 小節から始まる短調までのつなぎの部分で



ある。小節の始めに反復がある第 43 ～ 46 小節の部分は、Unpublished version（譜例 11）の第 38 ～ 39 小節から分かる通り、すっぱり抜けている。

第 46 小節左手の Gis は、“パルマ写本”では G となっている<sup>11)</sup>。（譜例 12）



## 2-1-2-2 第 48 小節～第 64 小節

“47 ～ 48 小節目にかけてソロがイ長調の属音 E に終止し、ここから E 音がペダル音として階段状に新しいテーマを支える<sup>12)</sup>”。第 48 小節から終極調整確立の第 78 小節まではイ短調（前半部終了のイ長調の同主調）に転調し、3つの部分に分けられる。

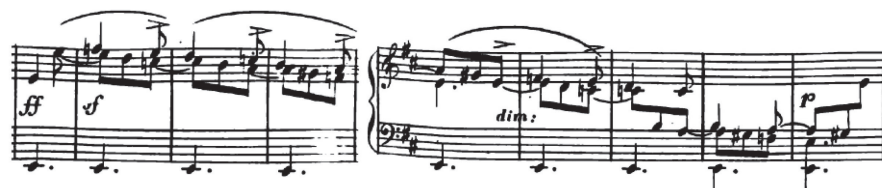
まず 1 部分は第 48 小節第 3 拍～第 56 小節第 2 拍までの下降の旋律部であり、右手の上部は 4 小節で F → Gis と 1 音ずつ下がり、1 オクターブ下で繰り返される。第 48 小節の 3 拍目からは、4 小節ごとのテーマがシンコペーションで始まり、リズムに変化を与えている。（譜例 13）

ベネチア写本・Longo においては第 51 小節と 52 小節のタイはないが、後続の上昇の旋律部との釣り合いおよび旋律から、譜例 14 の Czerny（Longo も同じ）、および譜例 14 の Unpublished version の相当部のように、第 49 ～ 50、50 ～ 51、51 ～ 52、52 ～ 53、53 ～ 54、54 ～ 55 小節の間にもタイがある方が効果的ではないかと思われる。左手は主音の E によるバスを続ける。

（譜例 13）



（譜例 14）



Unpublished version においては、左手が休符となっており、後続部の賑やかさとの対比が著しい。（譜例 15）



3 部分の第 2 部分は、第 56 小節の 3 拍目から第 64 小節の 2 拍目までであり、右手は 2 小節のフレーズが 1 オクターブ上に移動して繰り返し更にもう 1 度、左手はⅣとⅤの平行 5 度の持続低音が繰り返され、右手のオクターブの動きとは対照的に上下動が停滞している印象を受ける。

(譜例 16)



Unpublished version においては、第 51・52, 53・54, 55・56 小節の間にタイがなく、第 1 部分とは対照的にシンコペーションが極度に強調され、がさつな印象を受ける。(譜例 17)



### 2-1-2-3 第 64 小節～第 78 小節

3 部分の第 3 部分は、譜例 18 に示す第 64 小節の 3 拍目から第 78 小節の 1 拍目までであり、右手は次の第 78 小節以降に始まる 3 オクターブを超す跳躍を予想させるかのような上昇と、引き戻しが繰り返されるのに対し、右手の上昇に対応する左手は以下でカークパトリックが言及している、(第 57 小節～第 64 小節の) 溶解の形である。

以下で言及される「ナポリの六度」は譜例 19 に、Longo の該当部分は譜例 20 に示した。

カークパトリックは、“スカルラッティの和声の重ね合わせや縮小の技法のなかで、もっとも一般的なのはソナタ第 105 番におけるような徘徊的サブドミナントとドミナントとの融合である。この曲の場合その融合はこの両和音にある 5 度音程による継続する同時的保続によって行われている(中略)。同じような縮小(ママ)の過程はソナタ第 96 番の類似のパッセージにおいて、はっきりと視覚的にたしかめることができる。ここではサブドミナントとドミナントそれぞれの連続 5 度は(あとからの縮小で説明される)、はじめは別個のものとして存在するが、のちには 1 つのパッセージへと溶解されるようになる。このパッセージの終わりのところで、ロンゴは「訂正」の手を加えているが、それは保続音 H[B] に対して、スカルラッティがナポリの六を用いて、最上声部に B[B b] をもってきたからである(68 小節目)<sup>13)</sup>”と解説している。

“ナポリ 6 の和音(ナポリ 6 度)とは、下属音上の短 6 度、すなわち半音低められた第 2 音を言う。この音を持つ 6 の長 3 和音を〈ナポリ 6 の和音〉という。スカルラッティなど、ナポリ楽派によって愛用されたところからきたと言われるが、明白ではない。この和音は下属和音の第 5 音が短 6 度に置きかえられたものと考えられ、下属和音の代用としての機能を持つと同時に、短 6 度の下行導音性を利用して、エンハーモニック転調にしばしば用いられる<sup>14)</sup>”。

(譜例 18)



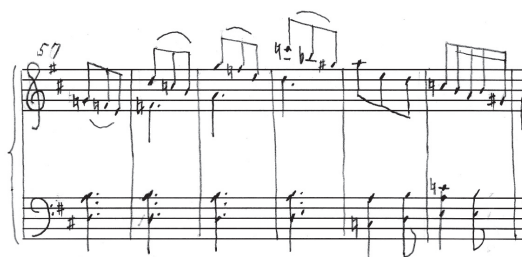
(譜例 19)



(譜例 20) Longo



(譜例 21)



Unpublished version においては譜例 21 に示すとおり、第 3 部分が 1 回で終わりすぐ跳躍に入る。

## 2-1-3 “終結調性確立部” (The Post- Crux) 第78小節～第94小節

イ短調より前半が終止する同主調のイ長調に転調する。この曲の印象を際立たせる左手 3 オクターブ超の交叉は、中間部をはさみ 3 回ずつ繰り返される I の分散和音の旋律である。

(譜例 22)



Unpublished version はこの部分（第 63 ～ 79 小節，譜例省略）は現行版の第 78 ～ 94 小節と全く同じであるが，現行版第 94 小節の第 1 拍のカデンツを以て前半が終了する．従って，第 77 ～ 79 小節が“終止（The final closing）”となる．

#### 2-1-4 “終結部” (The Closing) 第 94 小節～第 108 小節

第 94 小節からは再び tutti に戻り、イ長調とイ短調の交替を経て前半の終わりに至る。旋律は第 18 小節から 24 小節までの、ファンファーレの終局を思わせる箇所を連想させる。

右手は全てオクターブをなぞり、テクニックを誇示している。左手はまず軽快な旋律、そして最後の6小節は左手のAが6小節タイで続けられ、激しい動きの終わりを予告する。

カークパトリックは、“スカルラッティは王宮の楽団から他の楽器の語法を借用したが、それと同じくらい村の楽隊からも借用している。こうした方法でないかぎり、けっして王宮のなかにはいりこむようなことのなかった楽器や踊りのリズムが、スカルラッティのソナタのなかには数多く現れてきているのである。ときにはソナタ 96 番のように、ソナタの終結部分でトランペットとホルン、弦、木管、ドラムなどにギター、カスタネットなども加えられて、たいへんな混乱状態に落ちいってしまうこともあるのである<sup>15)</sup>”，としている。

(譜例 23)

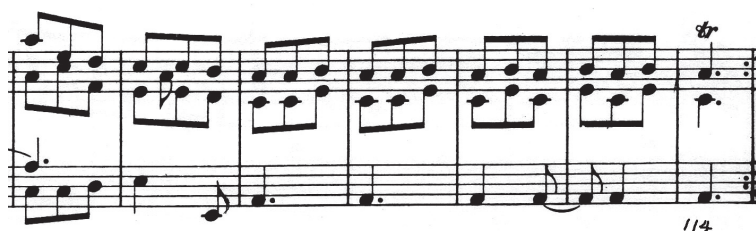


第 102 ～ 107 小節は、I と IV の和音が交互に現れ、第 108 小節で 2 つの和音が“溶解”される<sup>16)</sup>。ナポリ写本・Czerny・現行版にはある第 103 ～ 108 小節左手の G 音のタイは、Longo にはない。後半の相当部第 201 ～ 205 小節はいずれの版ともこのタイはなく、前後及び全曲の旋律との釣り合いから見て、タイのない方が妥当ではないかとも考えられるが、K.430 (L.463) の前半第 26 ～ 27 小節・38 ～ 39 小節、後半 80 ～ 81 小節の間の右上音のタイが、同じ旋律の 92 ～ 93 小節では取れているように、変化を効果的に表現している例もある。

## 2-1-5 “終止” (The Final Closing) 第 108 小節～第 114 小節

右手のオクターブが終わると第 (譜例 24)

108 小節からは冒頭に類似した倍音とホルン 5 度を用いた旋律が現れ、第 112 ～ 113 小節を 2 小節をまとめて 1 小節にし、4 分の 3 拍子のように演奏するヘミオラを経て、前半の終止を迎える。



## 2-2 後半 第 115 小節～第 211 小節

### 2-2-1 “開始部” (The Opening) 第 115 小節～第 137 小節

“後半は冒頭と似た素材で始まるが、すぐに第 48 小節からとられた短調のテーマへ移る<sup>17)</sup>”。まず前半終了のイ長調で始まり、頻繁な転調を繰り返す。第 119 小節からはホ短調、第 122 小節からは第 126 小節 1 拍目まではイ短調、ただし第 124 小節の 2 拍目からはイ短調であるともイ長調であるとも考えられ、126 小節の 2 拍目に至り Cis 音でイ長調を確立する。第 127 小節からはト短調に移り、第 131 小節でイ長調に戻り、右手の前半第 49 小節～ 52 小節を長調にし転回させたような旋律と左手のオクターブにより第 137 小節のカデンツで終わる。

第 121 ～ 126 音節と、その同じ箇所 Czerny と Longo は、ベネチア写本・現行版及び相当する Unpublished version との間でタイのかけ方に大きな違いが見られる。後者でタイが見られるのは譜例 25 の示す通り第 129 ～ 130 音節の箇所のみであるが、Longo においては譜例 26 の示す通り、第 121 音節から第 130 音節まで全ての右手の 1 拍目が前小節からタイがかかり、シンコペーションのリズムとなっている。その上、タイのかかっていない上音は現行版が 8 分音符の連続により刺激的な旋律になっているのに対し、4 分音符で大人しい旋律となっている<sup>18)</sup>。

この違いは前半の第 48 ～ 56 小節に平行するものであり、Czerny と Longo はタイにより前半と後半を同質の旋律としているのに対し、ベネチア写本と現行版は前半は大人しいが後半は刺激的に、Unpublished version は譜例 17 の通り該当部分はタイで同質にしているが、前半のこれに続く部分のタイを外し刺激的な旋律にしている。

第 131 小節 2 拍目からは、右手は 6 度上昇が 3 回、左手は下降の旋律である。



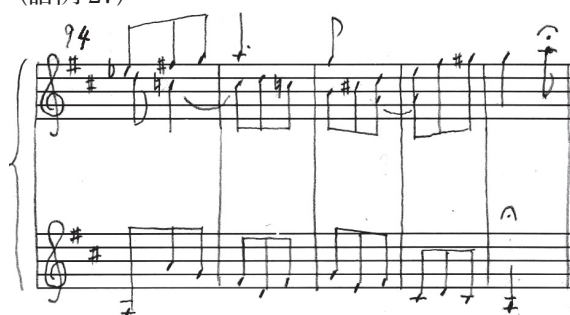
(譜例 25)



(譜例 26)



Unpublished version は、後半開始の第 80 ～ (譜例 27)  
95 小節までは、現行版第 115 小節～ 130 小節と  
同じであるが、譜例 27 にあるとおり、第 96 ～  
97 小節の右手が和音となりタイで下音がつなが  
り、また左手は和音ではなく、現行版の第 133  
～ 136 小節の抜け繰り返しが抜けてカデンツに  
至っている。



2-2-2 “終結調性開始部” (The Pre-Crux) 第 138 小節～第 165 小節

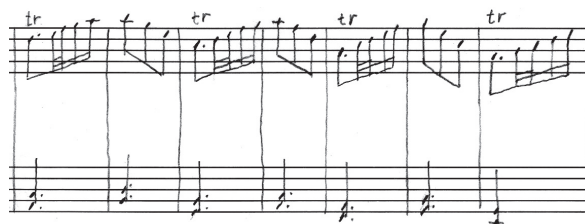
2-2-2-1 第 138 小節～第 145 小節

“137 小節目でトゥッティがイ長調で終止し、反復音を含んだソロの部分になる。そして反復音から徐々に響きが増していき、またフル・オーケストラ (トゥッティ) になる。165 小節目からは前半とは違った形で手の交差がでてくる<sup>19)</sup>”。

第 138 ～ 145 小節は、左手の 3 度の和音の動きは少々異なるが、前半の第 26 ～ 31 小節を模倣した 4 度下降の旋律である。(譜例 28)



Unpublished version (第 99 ～ 105 小節) の左手は、対位的動きをする単純な旋律となっている。(譜例 29)



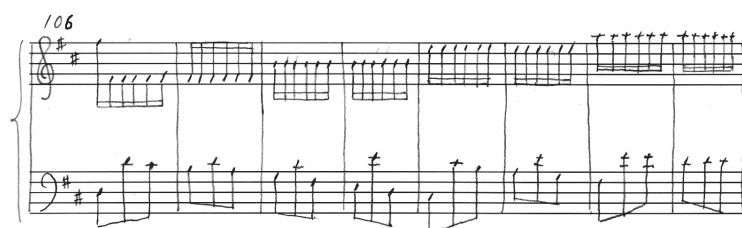
## 2-2-2-2 第 145 小節～第 157 小節

第 145 小節からの同音反復は、前半部の第 33 小節以降の模倣であるが、前半部が上昇した音からそのまま同音反復するのに対し、この後半部では一旦 1 オクターブ下げ、4 度ずつ 4 回上げ前半部より高い位置に至る。同音反復は前半部に見られたが、後半部では 2 小節ずつ 4 度、4 回上がり高まりを見せている。左手も最後の同音反復である第 151 小節 2 拍目からはオクターブの和音となり高まりを更に盛り上げている。(譜例 30)



Unpublished version においては、第 106 小節（現行版の第 145 小節）冒頭の 1 拍目の F が 8 分音符から 1 オクターブ下降する 16 音符になり、2 音目は同音反復につながる。現行版の方が音の響きを厚く感じさせ、効果的である（ただし、後述の通り逆のような例が現行版第 181・185 小節にある）。左手は譜例 31 の通り、オクターブの和音にならない。

(譜例 31)



第 153 小節からは、4 回目の同音反復の後で更に 4 度上がった Fis から一気に降下、揺り戻しを経て 2 オクターブ下降したところでカデンツとなる。Unpublished version は下降の起点が 2 度低い。

(譜例 32)

(譜例 33)



## 2-2-2-3 第 157 小節～第 165 小節

第 157 小節～165 小節は、前半冒頭部に類似した倍音とホルン 5 度の旋律である。Unpublished version はこの部分が抜けている。(譜例 34)



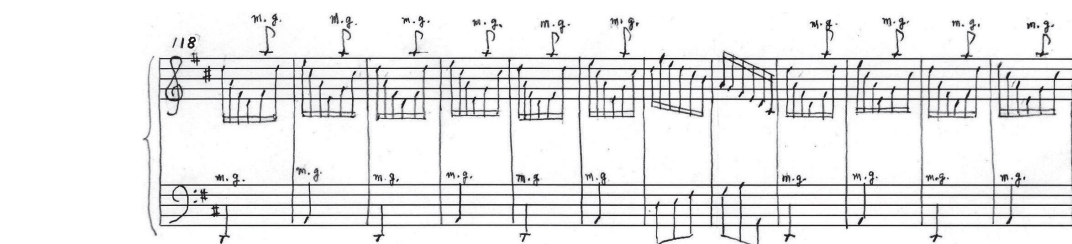
### 2-2-3 “終結調性確立部” (The Post-Crux) 第 165 小節～第 181 小節<sup>20)</sup>

交差部の右手は前半と同じく I の分散和音であるが、左手は単純な旋律である。カークパトリックは K.55 (譜例 37<sup>21)</sup>) にこの部分の (右手の) 形を思わせる箇所があると指摘している<sup>22)</sup>。

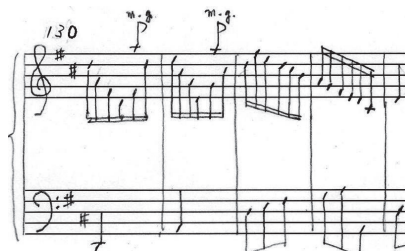
(譜例 35, 第 165 ～ 172 小節と第 173 ～ 180 小節は全く同じである)



(譜例 36)



(譜例 37) K.55 第 35 ～ 47 小節



### 2-2-4 “終結部” (The Closing) 第 181 小節～第 205 小節

“続いて長調と短調がフル・オーケストラで行き来する「グランド・フィナーレ」(カークパトリックより引用) となり、奮起をうながすようなヘミオラが興奮気味に曲を終結させる<sup>23)</sup>”。再び Tutti となり終曲を迎える。カークパトリックは、“スカララッティは同一曲内にあるどの和音も、長・短いずれの和音へも変化できると考えていたようである。長・短三和音による明暗の変化を容易にしているこの取り扱いが、スカララッティの多くの曲の外観に多彩で変化のある色どりをあたえているのである<sup>24)</sup>”，としている。(譜例 38)



Unpublished version では、このカデンツ (譜例 39)

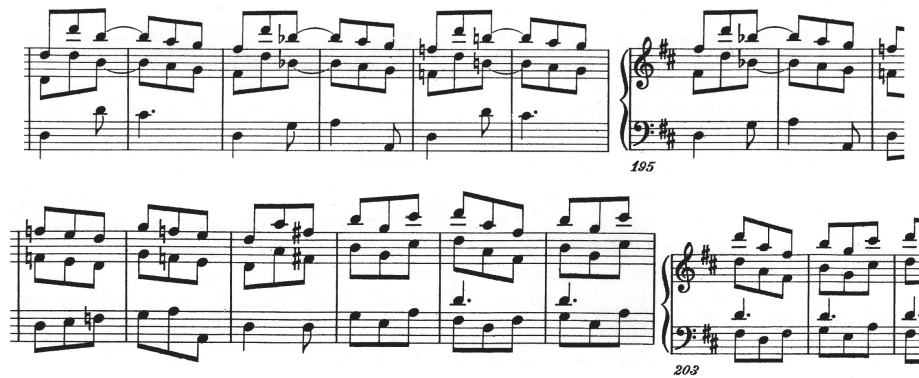
で曲が終わる。右手の第 136 小節は現行版の 8 分音符 + 4 分音符が 4 分音符 + 8 音符になり、第 137 ～ 138 小節と第 140 ～ 141 小節のタイがなく、終曲部で不用意に不安定な印象を受ける。



現行版は更に拡大されて 2 小節ずつニ長調とニ短調の転調を繰り返し、前半と同じく I と IV の和音



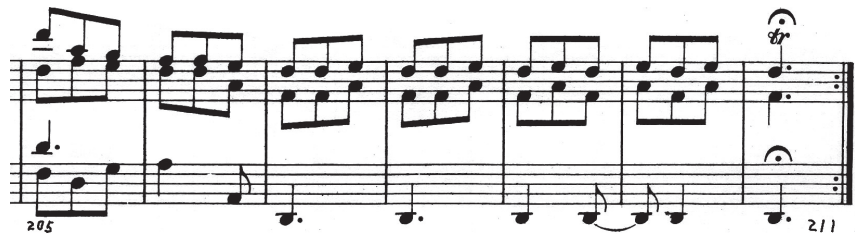
の部分を経て、終止部に至る。(譜例 40)



#### 2-2-5 “終止” (The Final Closing) 第 205 小節～第 211 小節

前半と同じく、右手のオクターブが終わると全曲の冒頭に類似した倍音とホルン 5 度を用いた旋律が現れ、第 209～210 小節の 2 小節をまとめて 1 小節にし、4 分の 3 拍子のように演奏するヘミオラを経て、全曲の終止を迎える。(譜例 41)

ロンドン 31553 写本は  
第 205 小節の D (附点 4  
分音符) が欠けている<sup>25)</sup>。



### 3. まとめ

それでは最後に、この曲の構成について振り返っておくことにしよう。

前半の冒頭は tutti で、ニ長調による倍音とホルン 5 度のファンファーレにより始まり、I の和音を下からトリルで組み立て賑やかになって、オクターブの和音にはさまれた中間の音が上下に動く、倍音とホルン 5 度の旋律で頂点に達し、属和音で終わる (第 1～25 小節)。

属調のイ長調に転調して solo となり、1 拍目のトリルが 1 音ずつ 4 度下降し、更に同音反復が転調しながら 1 音ずつ 4 度下降して、終結部を迎える (第 26～48 小節)。イ短調に転調してからは 4 小節で 1 オクターブ、更に 1 オクターブ同じ旋律で下がる。次も同じ旋律による 1 オクターブの上下動が繰り返され、ナポリの 6 度で最高潮を迎える (第 48～78 小節)。イ長調に転調して、3 オクターブを超える跳躍を 3 回繰り返す左手と、I の分散和音を奏でる右手の交差が計 2 度繰り返され、テクニックを誇示する。(第 78～94 小節)。

Tutti に戻り、右手はオクターブの和音が続き、イ短調からイ長調に続く上下動の小さいシンコペーションの旋律の後に、I と IV の和音が繰り返され最後には融合する (第 94～108 小節)。冒頭のファンファーレを再現した旋律により属調で前半を終了する (第 108～114 小節)。

後半はイ長調による前半冒頭の逆行形による tutti で始まる。ホ短調のつながぎを経て、イ短調とト短調の旋律を経て、最後にイ長調による上昇の旋律が繰り返されてカデンツを迎える (第 115 小節～第 137 小節)。

主調のニ長調に戻って solo となり、前半と同じく 1 拍目が 1 音ずつ 4 度下降する。続く同音反復



は前半の下降とは反対に、4度ずつ4回上がり、上がり切ったところから2オクターブ下降する（第138～157小節）。前半冒頭の倍音とホルン5度のファンファーレが再現され、跳躍と交差の部分に続く（第157小節～165小節）が、跳躍と交差の旋律は前半より単純である。右手は同じくIの分散和音が奏でられる（第165～181小節）。

tuttiに戻り、右手はオクターブの和音が続いて、二短調から二長調に続く上下動の小さい、前半と同じ旋律のシンコペーションの後に、二短調によって前の旋律が拡大され、前半と同じくIとIVの和音が繰り返され最後には融合する（第181小節～205小節）。冒頭のファンファーレを再現した旋律により全曲が終了する（第205～211小節）。

最後に、Unpublished versionはCDの解説書でMalcoln Boydが言う通り、simplified versionではなく、本論で見た比較より、現行版の古い形ではないかと筆者は考える。

## 注

- 1) 写本の詳細については原田 2011 参照。Kirkpatrick 1953（原著）の巻末にある、版本一覧表 CATALOGUE OF SONATAS の p.445 K.96 の欄には、“Primary Sources”として“Before 1746 Boivin(,Pièces) III 5”, “Note”の欄に“Also Venice XV 6, Source in Longo incorrectly Venice II 6 とある。Venice II 6 は下記の閲覧先によれば、K.182 である。
- 2) 東京文化会館音楽資料室の書誌と収蔵本による。K.96 にあたる L.465 は Vol.10 に収められており、同書の巻頭ページには「RIPRISTINO 1951」と印刷されている。
- 3) 以下、構成各部の名称はカークパトリック 1975 p.261「第11章 スカルラッティのソナタの解析」による。本文で論じるソナタ K.96 の構成要素分析は、カークパトリックの著書においては行われていないため、K.3・44・105・209・395・421 に対する分析より筆者が判断した。
- 4) 「YAMAHA 音楽解体全書」しびれる五度の響き  
<http://www.yamaha.co.jp/plus/horn/trivia/?ln=ja&id=107003> (2016 年 12 月 23 日閲覧)。
- 5) 原田 2011。
- 6) "tremulo di sopra" means to trill to the upper note (not start on the upper note) Note - this is the "standard" trill nowadays. ( eMusic Theory Forums)  
<http://forum.emusictheory.com/read.php?5,1882,1882> (2016 年 12 月 23 日閲覧)。
- 7) 原田 2011。
- 8) 原田 2011。
- 9) トーマス・シューマッカー 2013 p.46 以下。引用部分の太字は原文の通りである。
- 10) 急速に繰り返される反復音 (V-MS. や P-MS. では、第 96 番や第 221 番、その他のトリルにおいて「指を変えて」(mutandi deti) と指示されている) …。(カークパトリック 1975 p.193 IX スカルラッティの鍵盤楽器テクニック)
- 11) 原田 2011。
- 12) トーマス・シューマッカー 2013 p.47。
- 13) カークパトリック 1975 p.244 X 縮小と拡大。
- 14) 標準音楽辞典 P.1287。
- 15) カークパトリック 1975 p.212 IX 他の楽器からの模倣。

- 16) 注 17 参照.
- 17) トーマス・シューマッカー 2013 p.48
- 18) Czerny も小節間のタイは Longo と同じであるが、同じ小節にある 8 分音符をタイでつなげる形をとっている.
- 19) トーマス・シューマッカー 2013 p.48
- 20) 前半が交差の部分から終極調整確立部となっているのとの釣り合いを考え、この解析を行った.
- 21) 序の②に挙げた Czerny の版本の No.161 p.487 より引用した.
- 22) カークパトリック 1975 p.141 VIII ソナタという曲名について、( ) は筆者による補足である.
- 23) トーマス・シューマッカー 2013 p.48 ～ 49 管見の限りではカークパトリック 1975 にはこのような言及はない.
- 24) カークパトリック 1975 p.217・218 X 主要三和音および関連する 3 種の三和音.

## 文献

原田広司, 2011, 「ドメニコ・スカルラッティの鍵盤ソナタに関する資料の比較研究: K.43 から K96 までの筆写譜を中心に」『広島文化学園大学学芸学部紀要』(1): p.1-14.

2008, 『新訂 標準音楽事典 第二版』音楽之友社.

Ralph Kirkpatrick, 1953, Domenico Scarlatti. (=1975, 千蔵八郎・阪本みどり共訳『ドメニコ・スカルラッティ』全音楽譜出版社

Thomas Schunacher, Scarlatti Sonatas. A Study Guide. (=2013, 中村菊子監修, 大竹紀子訳『スカルラッティ鍵盤楽器ソナタ 演奏の手引き』全音楽譜出版社.)

## A Study of Domenico Scarlatti's Sonata K.96 (L.465)

NOMA Akira

**Abstract:** Italian origin keyboard virtuoso Domenico Scaltatti (1685~1757) is called “Interesting Historical Misfit” in the history of music, as his works are against the rules and too unique to find his ancestors or descendants. Sonata K.96 (L.465) retains many of Scarlatti's characteristics of his masterpieces: the difficult repeater notes, abrupt changes of tones, drastic dissonance, imitation of other musical instruments, huge leaps and athletic hand-crossings. This paper outlines these characteristics, the progress and construction of its parts, and also outlines the differences with another little-known unpublished version, which reduces its length by 69 bars and is thought of as a precedent of present version, K.96.